

文段分析の一考察(2)

—— 指示表現「こうした」「そうした」に観察される統括機能 ——

塩 澤 和 子

I 文章における統括機能

時枝誠記(1950)が、「言語に於ける単位的なもの」(21頁)として「語」と「文」の他に「文章」を立て、「文章研究が、文法学上の一単位として、その一領域を占めるものであること、またその必要な所以は、既に総論の中で述べた。」(284頁)とし、従来、文法学上、ほとんど問題視されなかった文章論を「文法学の重要な対象として考察する」必要性を提唱して以来、文法論の中における文章論の位置付けの問題、「展開する文連鎖の流れを統括してそれに完結性を与える仕組みや、その結果全体が質的に統一されて『文章』の資格を得るルール」^(註1)をめぐる問題など、多くの論議が重ねられ、今日に至っている。特に文章構造を解明するに有効な単位として「文」と「文章」の中間に「段落」という単位を設定することが一般に行われるが、その用語や概念規定に必ずしも統一性があるわけではなく、「論理的段落」「形式段落」「文塊」「文段」「段」等が並び行われ、個別に研究が進められている。しかも「段落」の認定に関しても、有効な客観的な基準が立てられているわけではなく、諸種の観点から複数の文集合を部分的にまとめあげ、文章として完結する仕組みを論じているのが実情である。

このような中で、佐久間まゆみ(2003)の「文章・談話における『段』の統括機能」は注目される。佐久間は「文章・談話の構造を記述するのに有効な最小単位として『文』および『節』という単位を設け、さらに、『文』と『発話』の上位に位置する『文段』・『話段』の総称としての『段』を、文章・談話の直接的な成分として考える。」(92頁)とし、「『段』という仮説的単位を設定」(94頁)する。そして「文章の『統括の重層性』とは、『相対的な統括機能』を有する段の重層構造に基づくものであり、大小様々な話題のまとまりを表す相対的な統括力の違いによる段の相互関係を前提とするものとして考えたい。」(95頁)と述べる。また「段の統括機能には、2種類の方向性が考えられる。」(99

頁)とし、「外的統括」と「内的統括」を設定する。前者は「前後に位置する他の段との相互関係を作り上げる外向きの統括機能」であり、後者は「段の内部にある複数の文集合を一つの話題にまとめあげる内向きの統括機能」と規定する。この統括の方向性を視野に入れた「段の統括機能」を担うのが「中心文」(時に「主題文」も)であるが、それは必ずしも単独の文構造を取る形式を想定しているだけではなく、「一対の『提題表現』と『叙述表現』からなる『題一述関係』に基づく、話題の統括機能を有する『情報単位』であり、いわゆる『節』に相当する成分と考えるほうがよいだろう。」(93頁)との立場を取っている。

佐久間は、文章の「統括」の概念規定を、基本的には永野賢(1986)の「統括の定義」に従っているとしながらも、

文章を統括する言語形式の「基本的単位」として「文」を考える永野が、実際には「語句」や「段落」が統括機能になうこともあるとする点に、統括の概念規定と文章論の統括機能を担う言語形式との乖離が認められる。(94頁)

と指摘し、佐久間の考える「情報単位」を基本とし、「語句」は一切視野に入らずに、文章の統括の実態を観察する方法の妥当性を主張する。

確かに「中心文」が文章の「統括機能」を担っていることは否定すべくもないが、それでは佐久間が「乖離が認められる」として問題視した「段落」「語句」には、「統括機能」を担う資格が認められないのかという点になると、疑問を覚えずにはいられない。

そこで、まず永野賢の「統括の定義」を確認するところから論を進めていきたい。

「統括」とは、文章を構成する文の連続において、一つの文が意味の上で文章全体を締めくくる役割を果たしていることが言語形式の上でも確認される場合、その文の意味上形態上の特徴をとらえて文章の全体構造における統一性と完結性とを根拠づけようとする文法論的観点である。

文章が文の連続によって成り立つとすれば、文章を統一し完結させる機能を果たすものは、連続する文の相互関係の中に見いだされるはずである。右の定義で文章を統括する言語形式を“文”としたのはそのためであるが、実

実際は、文中の一つの語句がその機能を果たしていると認められることもあり、また、文の集合としての段落がその役割を果たすと考えられることもある。(315・316頁)

引用が少し長くなったが、永野賢は「着眼の基本的単位」はあくまで「文」であると見なしつつも、「文中の一つの語句」「段落」までも視野に入れて「統括」の機能を論じている。そして「文中の一つの語句」に関しては、「それはあくまでも“文”の中に位置を占めた“語句”であり」と断っている。

永野賢は「“文”の中に位置を占めた“語句”」とは、どのような言語形式を想定しているのか、例がないので推測の手だてはないが、しかし実際に様々な文章を観察すると、佐久間まゆみの想定する「一对の『提題表現』と『叙述表現』」からなる『題一述関係』に基づく、話題の統括機能を有する『情報単位』だけではなく、文中の「語句」にも統括機能を有していることが確認できる。その語句の一つが本稿で取り上げる指示表現の「こうした」「そうした」である。

そこで指示表現「こうした」「そうした」(以後、片仮名表記のコウシタ、ソウシタを使用する)が文章中で果たす意味、機能を検討することで、従来論じられてきた「中心文」とは異なる視点で、文章の統括機能を観察することができるのではないかと考える。

II 指示表現の機能と出現位置

時枝誠記(1950)は、「文章の構造的性質は、(略)思考展開の表現にある」(290頁)と見なし、「このやうな展開を表現するものとして、最も重要な役割を果たすのは、接続詞及び代名詞である。」と述べる。接続詞は、「文章展開の重要な標識である」(290頁)が、代名詞は「他の体言と異なり、事物の概念を表現するといふよりも、話手と事物との関係概念を表現することを任務とするものであるから、一切の事物は、代名詞によって総括されることとなる」と述べ、「代名詞は、分裂展開する思想を集約して、これを統合する任務を持つものである」(以上、291頁)と規定する。

思考展開を表現するものとして、最も重要な役割を担うとされる接続詞と代名詞であるが、時枝誠記による文章論の提唱以来、接続詞の研究は飛躍的に発展したのに対し、代名詞に関しては、文法論の範囲に止まる研究^(註2)が主流を

なし、文章論の領域に関わる研究^(註3)はさほど関心が高くないというのが現状である。

本稿では、代名詞が「分裂展開する思想を」どのように「集約して」、「これを統合」するのか、つまり代名詞がどのような統括機能を持ち「文段」成立に関与するのか、という点を究明したいと考える。

なお、考察に当たり、用語は、「代名詞」ではなく、文章論で使用する「指示表現」を用いる。また研究方法として、コウシタ、ソウシタが文章中に出現する位置に注目し、出現位置と統括機能との関係から考察を進めていくことにする。

ここで出現位置に関して述べておく。出現位置はまず第一に、文章全体から見て〔冒頭部・展開部・結尾部〕のいずれの位置に出現するか、第二に、段落の〔冒頭文・中間文・結尾文〕のいずれの文に出現するか、この二点から検討することにした。

第一の文章全体から見た出現位置であるが、社説などの論理的文章では、〔冒頭部・展開部・結尾部〕という三部構成を取るのが一般で、各々の出現位置によって文章中で果たす役割が異なっていることが指摘されている。たとえば時枝誠記(1960)は、「文章表現においては、表現の根元となる冒頭文が、重要な意味を持って来る」(52頁)と述べ、「文章における冒頭を、その機能の点から」(58頁)5つに分類し、他に「冒頭のない文章」にも触れ「書き出しのない文章はないが、冒頭のない文章といふものはあり得ることである」とする。時枝誠記が提示する冒頭の5分類は次のようである。なお結尾部には論究していない。

- 1 全体の輪郭、枠の設定であって、時、処、登場人物が提示される。
- 2 作者の口上、執筆の態度を述べたもので、本文に述べられる事柄とは明らかに次元を異にしてゐる。
- 3 全体の要旨、筋書、概要を述べる。前項の冒頭が、表現に対して異次元のものであるのに対して、この冒頭は、本文と同次元のものである。
- 4 作品展開の種子或は前提となる事柄の提示。
- 5 作者の主題の表白。

次に市川孝(1978)は、「文章の構成にかかわる重要な問題として、文章の冒頭と結尾の型についてまとめてみよう。」(161頁)と述べ、文章の冒頭の型

を三類九種に分類する。

〔叙述内容の集約としての冒頭〕

- (a) 主題・要旨・結論・提案などを述べる。
- (b) 主要な題材・話題について述べる。
- (c) あら筋・筋書きを述べる。

〔本題に対する前置き・導入としての冒頭〕

- (a) 筆者の立場・意向・執筆態度などを述べる。
- (b) 本題の内容を規定し、本題に枠をはめる。
- (c) 導入として、時・所・登場人物を紹介する。
- (d) 本題に入る前に「まくら」を置く。
- (e) 本題に対して対比的な内容を述べる。

〔本題を構成する一部としての冒頭〕

また結尾部に関しては、「文章の結尾の類別について、(略)冒頭の型にだいたい対応して」(164頁)、三類七種に大別する。

〔叙述内容の集約としての結尾〕

- (a) 主題・要旨・結論・提案などを述べる。
- (b) 主要な題材・話題について述べる。
- (c) あら筋・筋書きを述べる。

〔本題に対するつけたりとしての結尾〕

- (a) 筆者の立場・意向・執筆態度などを述べる。
- (b) 本題の内容を規定し、本題に枠をはめる。
- (c) 本題と関連のある事柄や感想などを、つけたりとして添える。

〔本題を構成する一部としての冒頭〕

本稿では、文章の〔冒頭部・結尾部〕を判定するに際し、市川孝の分類を参考にすることにした。また〔展開部〕の判定は、冒頭部、結尾部に含まれない残りの部分と解することにした。

次に第二の、「段落」での出現位置についてであるが、まずここで「段落」を手がかりにする点について述べておく。文章論では、市川孝(1978)が「問題は、改行によって区分された文集合と内容上のまとまりとが一致しない場合

が少なくないという事実である」(144頁)と指摘するように、文章の重層構造を解明するためには、文と文章との中間にある単位として、「段落」とは別に「文段」という概念が設定され、「内容上のまとまり——文連接の内容上の連合という観点」(145頁)から規定され、「文段」を客観的に認定する方法が論究されてきた。

しかし本稿では、後述するように、社説の1段落は大勢が2文か3文で構成されており、時に1文1段落も存在する。その点を考慮して、「改行によって区分された文集と内容上のまとまり」とが一応一致していると見なすことにした。そのため永野賢(1986)が「客観的な文脈」とみなす、「文章の段落」として設定される「形式段落」(100頁)を拠り所にすることにした。

そこでコウシタ・ソウシタが「段落」の〔冒頭文・中間文・結尾文〕のいずれに出現し、そこにどのような機能が観察されるのか、検討する方法をとる。

最後に、分析の対象にするデータに触れておく。

本稿でデータとした「朝日新聞(朝刊)」の社説は、1回分が2題目から成り立つことが多く、論題が大きい場合など、月に1回程度は、1題目のみの場合もある。社説では1題目分が、大体1400字前後、15段落前後で構成され、1段落は平均2文か3文で成り立っている。中には1段落1文もあるし、希に4,5文からなる段落もある。そこで段落中の出現位置を判定するにあたり、1段落1文構成は、その文を〔冒頭文〕と見なし、1段落2文は、各文を〔冒頭文・結尾文〕、1段落3文は〔冒頭文・中間文・結尾文〕と判断した。4文以上で構成される場合は、〔冒頭文・結尾文〕以外をすべて中間文とした。

分析の対象として用いた資料は、朝日新聞「社説」3ヶ月分である。

朝日新聞「社説」

	コウシタ	ソウシタ
2005年4月1日～4月30日	22例	17例
5月1日～5月31日	23例	14例
6月1日～6月30日	14例	19例

月ごとの頻度に多少ばらつきがあるが、コウシタは3ヶ月分で59例、ソウシタは同じく50例、抽出した。4,5月は、ソウシタに比べるとコウシタの方が頻度が高く、6月はその逆の結果であるが、合計すると出現頻度に両者間であまり大差のないことが確認できる。社説によっては、コウシタとソウシタが共存

する例、いずれか一方のみが出現する例、などあり、1社説で両者併せて1、2例程度の出現である。中には1例も確認できない社説もある。月の初めから月末にかけて、ほぼ全体的に出現し、特定の題目に限って集中的に出現することはない。ただし6月分のコウシタの14例に限って言えば、6月16日までに出現したもので、6月17日以降は1例も確認できなかった。

なお、文脈指示に観察されるコ系の指示語（コウシタなど）とソ系の指示語（ソウシタなど）の使い分けに関しては、森田良行（1993）が「話材に対する書き手の心理的距離・話材に対する把握の仕方の差異によるのである。」（86頁）と見て、詳細な考察をしているが、本稿ではコウシタとソウシタを一括して扱い、両者間に顕著な相違が認められる場合に限り、両者の機能上の差異を検討することにした。

Ⅲ 出現位置から見たコウシタ・ソウシタの機能

まず、抽出したデータ、コウシタ59例、ソウシタ50例を文章中の出現位置によって〔冒頭部・展開部・結尾部〕に分類する。分類に当たっては、先述したように市川孝の冒頭の型と結尾の型を参考にした。次いで、各部の〔段落〕に含まれる文を〔冒頭文・中間文・結尾文〕に分類した。

この分類を基に、コウシタ・ソウシタが指示する先行叙述の指示対象を調べると、次の3種〔a・b・c〕に大別することが出来た。

- a 各段落の2文目（中間文か結尾文に相当）に出現し、当該段落の冒頭文を指示する。
- b 各段落の冒頭文に出現し、先行段落（先行段落内の文集合か文中の語句など）を指示する。
- c 各段落の中間文か結尾文に出現し、当該段落内の先行文（先行の文集合）を指示する。

以上、文章中での出現位置、段落中での文の種類、先行叙述の指示対象〔a・b・c〕を基に、109データを分類整理すると、〈表1〉の結果となった。

〈表1〉

文章／段落	対象	コウシタ	ソウシタ	合計
1 冒頭部 (小計)		(1)	(5)	(6)
1.1 段落の冒頭文	b		2	2
1.2 段落の中間文	a		1	1
	c	1		1
1.3 段落の結尾文	a		1	1
	c		1	1
2 展開部 (小計)		(49)	(38)	(87)
2.1 段落の冒頭文	b	27	14	41
2.2 段落の中間文	c	4	1	4
2.3 段落の結尾文	b	4	1	6
	c	14	22	36
3 結尾部 (小計)		(9)	(7)	(16)
3.1 段落の冒頭文	b	6	2	8
3.2 段落の中間文	b	1		1
3.3 段落の結尾文	b	1		1
	c	1	5	6
合計		59	50	109

コウシタは文章の〔展開部〕に多く出現し、59例中49例(83%)にも達している。このうち特に「段落の冒頭文b」には59例中27例(45.8%)にも達し、「段落の結尾文c」の14例(23.7%)と合わせると、41例(69.5%)にもなる。

ソウシタも〔展開部〕に多く、50例中38例(76%)にも達する。このうちソウシタの方は特に「段落の結尾文c」が50例中22例(44%)にも達し、「段落の冒頭文b」の14例(36.8%)と合わせると、36例(72%)にもなる。なお〔展開部〕の他、数値は低いが〔冒頭部〕〔結尾部〕にも出現し、比較的全体に渡って現れる傾向がある。

コウシタが「段落の冒頭文b」に、ソウシタは「段落の結尾文c」に頻出する傾向があるのは、両者間に統括機能に違いがあることに関係するののかも考える。

コウシタ・ソウシタとも「段落の中間文」での出現は低い。

以下、コウシタ・ソウシタの出現位置と指示対象を観点として、表中に付した番号に準拠しながら、文章中での統括機能を観察していくことにする。なお必要に応じて、中間文と結尾文を一括して扱うこともある。

Ⅲ.1 冒頭部

冒頭部には、コウシタは59例中、段落の中間文cに1例(1.7%)のみ、ソウシタは50例中5例(10%)、段落中のいずれの文にも出現する。

1.1 段落の冒頭文bに出現するソウシタ(2例)

ソウシタはいずれも2段落目の冒頭文に出現する。1段落目(1文構成)の話題を指示し、それを2段落目に取り込み、1, 2段落を合わせて、社説が論題とする話題を提示する冒頭部を構成する。

〔例1〕5月26日

- 1 ①米国産の牛肉は、国産の牛肉と同じぐらい安全なのかどうか。
- 2 ①そうした諮問が、厚生労働省と農林水産省から内閣府の食品安全委員会に出された。

〔例1〕は、米国産牛肉の安全性を巡り、食品安全委員会への要望を論じたものである。1段落目の安全性への問いかけを受け、2段落目の冒頭で「そうした諮問が」ととらえ直され、社説の話題を提示する文が整えられる。

このように文章の冒頭部、2段落目の冒頭文bに当たるソウシタは、1段落目を指示対象として、それを2段落目に取り込み、1, 2段落をまとめてそれを社説の冒頭部として整える、という働きが確認される。

1.2 段落の2文目(中間文aか結尾文a)に出現するソウシタ(2例)

社説では、例は多くないが、1段落目の冒頭文で題目語句の説明を行い、それをソウシタが指示して後接の語句につなげる形が観察される。題目語句の意味内容、システム、定義などを明確にし、論述の出発点とする際に見られる。

〔例2〕6月1日

「住基ネット やはり個人の選択に」

- 1 ①すべての国民に11けたの番号を振り、氏名や住所などの個人情報をコ

ンピューターで結んで総務省の外郭団体で一括管理する。②そうした住民基本台帳ネットワーク（住基ネット）が本格的に動き出してから1年9カ月になる。

〔例2〕は「住基ネット やはり個人の選択に」と題するが、①文では題目語である「住基ネット」の意味を説明する文になっており、②文の「そうした」が①文を指示して「住民基本台帳ネットワーク（住基ネット）」という後接の語につなげる働きをしている。社説の題目語の定義を行い、概念を把握しやすくする方法として2例観察された。

コウシタには、このような働きは確認できなかった。

1.3 段落の中間文c（コウシタ・1例）・結尾文c（ソウシタ・1例）

〔冒頭部〕の段落、結尾文cに出現するソウシタは、1段落目から2段落目に至る流れをまとめ、それを課題文とすることで、冒頭部の話題に区切りをつける働きが認められる。

〔例3〕5月14日

- 1 ①政府の一部門だった国立大学がそろって自立度の高い法人に衣替えしてから、1年余りが過ぎた。
- 2 ①法人化のねらいは、自主性を重んじることで教育や研究に活気を取り戻し、大学の個性を輝かすことにあった。②そうした目標の実現に、どれだけ近づいたのだろうか。

〔例3〕は、「法人化1年 国立大の手足を縛るな」と題し、衣替えして1年後の目標実現を検証する話題である。2段落目の結尾文cは「②そうした目標の実現に、どれだけ近づいたのだろうか。」とあり、社説の課題を提示する文となっている。3段落目以降は冒頭部の課題を基に「運営のあり方」「財政の自立」などから検証を進めており、〔展開部〕になる。社説の課題を提示する文に出現する「そうした」は、冒頭部を統括する働きを担っていると言えよう。

それに対し段落の中間文cに観察されるコウシタは、話題として取り上げる「③土地白書」が「③そう指摘している」とある中で、「そう」の指示内容として「②こうした変化は広がっていても、定着するには課題も残る」と出現す

るだけである。冒頭部での唯一の例ではあるが、冒頭部を統括する働きには直接関与していない。

Ⅲ.2 展開部

展開部には、コウシタが59例中49例（83%）、ソウシタが50例中38例（76%）出現し、両者とも最も出現頻度の高い位置となっている。このうちコウシタは、49例中27例（55%）が冒頭文bに、ソウシタは38例中22例（57.9%）が結尾文cに集中し、両者が段落中で果たす機能の違いを浮き彫りにする。

2.1 段落の冒頭文bに出現するコウシタ（27例）・ソウシタ（14例）

ソウシタは基本的に先行の1段落を指示することが多いが、コウシタは先行の1段落だけでなく複数の段落を指示する傾向があり、取り纏める範囲はソウシタより広い。またコウシタには、直接先行する段落ではなく、先行段落を幾つか飛び越えて、その先にある段落、または段落中の語句を指示することもある。

コウシタ・ソウシタが先行段落を指示し、それを語句の形式にとらえ直して冒頭文に取り込む際、文中には次のような言語形式で取り込むことが観察される。

- (1) [コ(ソ)ウシタ+語句ハ(ガ)]の形式をとる。(コ=13 ソ=4)
- (2) [コ(ソ)ウシタ+語句ヲ]の形式をとる。(コ=9 ソ=3)
- (3) [コ(ソ)ウシタ+語句ニ]の形式をとる。(コ=3 ソ=4)
- (4) [コウシタ+語句ノ中デ](コ=1), [コウシタ+語句に対して](コ=1)
[ソウシタ+なかでの](ソ=1), [ソウシタ+語句カラ](ソ=1)
- (5) 叙述表現の成分になる(ソ=1)

コウシタは、(1)(2)に集中し、特に(1)は27例中13例(48%)を占めており、(1)(2)を合わせると約81%にもなる。ソウシタは、(1)~(3)に集中する傾向がある。

2.1.1 (1) [コウシタ+語句ハ(ガ)]の形式をとる。(コ=13)

コウシタは主要節の提題表現が7例(ハ=6例, ガ=1例)、提題表現を構成する成分に組み込まれるのが4例、引用節での提題表現が2例である。叙述

表現は、「～わけではない・～てきた・～ことがある・～で(も)ある・～た・～からだ・(ガ)～ていく」などの形式をとる。

〔例4〕6月15日

- 6 ①南北が鉄道や道路をつなぐなんて、一昔前には想像もできないことだった。②経済協力や政府間の対話などで往来する人たちは、4年前の9千人から昨年は2万7千人に増え、貿易も膨らむ。
- 7 ①離散家族の再会はすでに10回を数え、北朝鮮の名勝・金剛山を韓国から訪れる観光客は100万人を突破した。②開城にある工場団地には韓国企業が出ていって第三国への輸出も始まった。
- 8 ①こうした蓄積は、悲惨な戦争を繰り返さないための仕掛けでもある。②曲折はあろうが、大切にしてもらいたい。

〔例4〕は「主要節の提題表現」の例で、「南北の5年 核の暗雲をどう払うか」と題する社説である。「太陽政策」による南北間の進展のめざましさを、6, 7段落目で具体的に列挙したあと、その6, 7段落目の内容を8段落目の冒頭文で「こうした蓄積は」と括りまとめ、提題表現とする。その提題表現に対し筆者は「悲惨な…仕掛けでもある」と見解を表明する。

このほか次のような例がある。(→印の前に示す数値は指示対象の段落を表す)

- 4月7日「3～6→7①こうした運動がテレビやインターネットを通じて互いに影響しあい、広がっていく。」
- 5月5日「6～7→8①こうした基礎的な体づくりは、かつては家の外で遊ぶことで培われてきた」
- 5月8日「6～7→8①こうした問題は、過去の是正論議で何度も指摘されてきた」
- 5月10日「7～8→9①こうした安全軽視の姿勢はこれまでも外部から批判されたことがある」
- 6月16日「3～4→5①こうした不動産証券化の市場は、ここ2年ほど急カーブで拡大し、累計で20兆円を超えた」

〔例5〕

- 5月22日「4～7→8①こうした米中の関係から連想されるのは、84年の日米円ドル委員会である」
- 5月29日「3→4①こうした犯罪で被害を受けた預金者に、まず銀行が弁償するよう求めるのが今度の法案だ」
- 6月16日「9②→10①この分野の先進国である英米では、こうした指標を提供する会社や非営利団体が活躍している」

〔例5〕は「提題表現を構成する成分に組み込まれる例」で、コウシタの出現する文のみ例示した。

これらの例に見るように、〔展開部〕段落の冒頭文にコウシタが出現すると、先行する複数の段落は提題表現としてとらえ直される。そして筆者はこの提題表現に対し、叙述表現で見解の表明、意見の主張、情報の提供、理由付け、などを行い、そこからまた新たに話題を展開させていることが確認できる。

このように展開部の段落冒頭文にコウシタが出現するのは、社説の展開方式と関わるのであろう。社説では、それまで論じてきた叙述内容を一度大きくとらえ直し、それを提題表現として立てることで、それまでの叙述内容を一度締めくくり、叙述の流れを一端中断させて、一つの話題に区切りをつける。しかしそれを提題表現に立てることにより、その先行叙述内容を踏まえて、そこから新たな話題の展開を図る、そういう展開方式を取っていると言えるのではないか。段落の冒頭文にコウシタが頻出し（59例中27例）、しかも提題表現を構成する形式が27例中11例（40%）も占めるのは、コウシタが複数の段落を大きく括りまとめる統括機能を有していることに関係があると見られる。

この中には、先行の複数段落を飛び越え、その先にある複数の段落を指示しているコウシタが1例確認される。それは冒頭文の引用部分に出現する。

〔例6〕4月11日

- 1～5→9①中国当局は、こうした暴力デモは絶対に認めないという姿勢を内外に明確に伝える必要がある。②首都北京でもこうした行動が許容されたということになれば、さらに地方へ波及しかねない。

〔例6〕は、「引用節での提題表現」の例で、「中国政府 なぜ暴力を止めないのか」と題する社説である。1段落目の「中国での反日デモが激しさを増している。」に始まり、「北京」をはじめ「広東省」「四川」「上海」「成都」での反日デモの状況が5段落目まで説明されている。6段落目から8段落目までは、反日デモに対して中国政府が取った姿勢への批判が叙述の中心である。従って9段落①文の「こうした暴力デモは」が直接指示するのは、1段落から5段落まで（3段落目は「町村外相」の取った行動であるため、除く）の内容であり、先行の6段落目から8段落目までを飛び越えての指示となっている。

このように先行叙述内容を再生させる指示の場合には、叙述内容を締めくくり叙述の流れを一端中断させる働きは認められない。

2.1.2 (1)〔ソウシタ+語句ハ〕の形式をとる。(ソ=4)

ソウシタは主要節の提題表現が3例、従属節の提題表現が1例である。叙述表現は、「～なければならぬ・～にちがいない・～すべきだ・～しても」の形式を取る。

〔例7〕4月12日

- 5 ①一連の反日運動の広がりには、中国側の事情による部分もあるに違いない。
- 6 ①急速な経済発展を通じて、貧富の差をはじめ、すさまじいスピードで社会変化が進んでいる。②そのことへの不安、不満が人々の間に蓄積され、国連安保理の常任理事国入りを掲げた日本が標的にされたのかもしれない。③90年代に強調された愛国教育が、若者たちの心に反日意識を植えつけた面も否めない。
- 7 ①そうした点は、中国にも十分考えてもらわなければならない。②わけでも暴力の取り締まりについて、中国に強く注文をつけるのは当然である。

〔例8〕4月18日

- 3 ①李外相はその一方で、小泉首相の靖国神社参拝や教科書問題が中国人民の感情を傷つけたと指摘した。
- 4 ①繰り返して述べるが、われわれも歴史問題の重要性を主張してきたし、日本にも反省すべき点があると考えている。

- 5 ①だがデモによる暴力行為が続き、中国当局がその責任を認めないという態度をとり続ける限り、そうした指摘は説得力を失うに違いない。②歴史を直視し、中国との関係を重視しようとする人々にも逆風になってしまう。

〔例7〕の「こうした点は」は、「中国側の事情」を具体的に列挙した6段落目を指示しており、それを提題表現として立て、筆者は「中国にも十分考えてもらわなければならない」と、意見を主張する。

〔例8〕の「こうした指摘は」は、段落を一つ飛び越えて3段落目の季外相の「指摘」を指示し、前提部の「5①だがデモによる～とり続ける限り」という条件下での、提題表現となっている。

これらの例に見るように、先行叙述内容を指示し、それを提題表現として立て、それに対する意見を述べるという構図は変わらないが、指示する範囲はコウシタに比べると狭く、いずれも先行の1段落が基本となっている。

〔展開部〕の段落の冒頭文に出現し、提題表現となるコウシタは、それまでの大きな流れを一時的に堰き止め、それらを取りまとめて提題表現として立て、そこから新たな話題の展開を図ろうとする時に、機能を発揮するようで、この部分での出現頻度は最も高い。それに対しコウシタが提題表現になるときは、部分的な流れを取り纏めて、部分的に話題を展開する時に多く使われるようである。

2.1.3 (2)〔コウシタ+語句ヲ〕の形式をとる。(コ=9)

〔例9〕4月9日(一部の段落を略す)

- 8 ①筋力トレーニングはどこでどのように受けるのか、どんな人が対象になるのか、肝心の新サービスの内容や値段、利用の限度額などの具体像が固まっていない。②このため利用者の中で「家事援助は使えなくなってしまうのか」との不安が広がり、野党から「やり方が強引だ」と批判を浴びている。
- 9 ①厚労省は市町村に新たに設置する「地域包括支援センター」で新しい予防サービスのプランを決めるという。②住民に身近な市町村がかかわるのはいい。③しかし、短期間のうちに公平な認定やサービスの態勢を

整えられるのだろうか。

- 10 ①国会の審議ではこうした点を一つずつ洗い出してほしい。
- 11 ①家事援助は栄養のバランスのとれた温かい食事や清潔な日常を提供することで、高齢者の健康維持と一人暮らしを支えている。②一部に不心得な利用例があるからといって、ほんとうに必要な人への家事援助まで打ち切ってはいけない。③審議のなかで、そのことを確認してもらいたい。

〔例9〕は「介護保険 筋トレもいけれど」と題する社説で、冒頭部では「1①国会で、私たちの老後の支えとなる介護保険を改正する法案の審議が進んでいる」と、話題を提示する。そして「改正の焦点」のうち、特に「介護予防サービス」の問題点を5段落目から論じている。8、9段落目で「予防サービス」の疑問点を例示し、それを10段落目①文で「こうした点を」ととらえ直す。

この10段落の冒頭文に、〔冒頭部〕に出現する「国会」「審議」が「国会の審議では」と提題表現で再登場するため、「予防サービス」に関わる話題は9段落目を以て一応区切られ、10段落目から「国会の審議では」を提題表現とする新たな話題に「こうした点を」として組み込まれる。

このほか次の例が観察される。

- (1) 4月16日「10①世界はこうした日中の対立をどう見ているのだろうか」
- (2) 4月20日「7①こうした悪循環を断ちきり、関係修復への転換点とすることだ」
- (3) 4月24日「8①日本のスポーツ界はこうした騒ぎを対岸の火事と受け止めてきた」
- (4) 5月8日「10①いつまで、こうした堂々巡りを続けるのか」
- (5) 5月13日「9①今すべきなのは、こうした悪循環を断つことだ」
- (6) 5月20日「7①こうしたビジョンの土台となる基本姿勢を、岡田氏は『自信に裏付けられた謙虚さ』と表現した」

いずれも〔コウシタ+語句ヲ〕が出現する冒頭文には、新たな提題表現が出現し、それまでの先行叙述を視点を切り替えてとらえ直していることが確認できる。例えば(1)は「1②デモ隊による日本大使館への投石事件をめぐって両

国が対立する」経緯を1段落目から9段落目まで叙述した後、突然10段落目で「世界は」と視点を切り替え、「世界」の視点から「こうした日中の対立を」どのように見ているのかと、とらえ直す形を取っている。

(3)では、1段落目に「①いま米国のスポーツ界に、禁止薬物を使うドーピング問題が重くのしかかっている」と述べ、7段落目まで米国スポーツ界に蔓延するドーピングを話題にしているが、8段落目で「日本のスポーツ界は」と視点を切り替え、1段落目から7段落目までの話題を「こうした騒ぎを」ととらえ直している。

(2)(4)では、段落の冒頭文を提題表現抜きでいきなり「7①こうした悪循環を断ちきり、関係修復への転換点とすることだ」、「10①いつまで、こうした堂々巡りを続けるのか」と、断定的に見解表明したり、詰問したりする叙述表現で始めているが、これは、それまでの先行叙述を筆者の視点で捉え直し、筆者が把握した状況を提題表現（非言語化）として立てるやり方で、ここでも視点を切り替えていると解することができる。

このように社説で抽出した例はすべて、新出の提題表現が現れ、話題を大きく切り替える段落の冒頭文に観察されるのである。

2.1.4 (2)〔ソウシタ+語句ヲ〕の形式をとる。(ソ=3)

ソウシタは、コウシタに比べると頻度が低く、また指示する範囲が狭い。また従属節を構成する成分に組み込まれる例が観察されただけである。部分的に先行段落を指示し、それを後続につなげる働きに関わっているに過ぎない。

〔例10〕4月21日

- 4 ①企業の防衛策がそうした新陳代謝の芽を摘んではならない。②行き過ぎを防ぐお目付け役として、日々の経営にあたる社長らとは距離を置く社外取締役は欠かせないというのが金融庁の判断だ。

「そうした新陳代謝の芽」は先行の3段落目を指しているが、この①文と②文は「①～摘んではならない」と「②～社外取締役は欠かせない」が並立し、「というのが」という引用節に組み込まれ、「金融庁の判断だ」の提題表現になるという構造を取るため、ソウシタは引用節中の成分となっているにすぎない。

2.2 段落の中間文 b・c に出現するコウシタ（4例）・ソウシタ（1例）

両者とも段落内の先行文(脈)を指示するが、コウシタは複数の文を指示し、それらを取り纏めて、筆者が断定的に捉えたり強調するしたりする部分に現れる。それに対し、ソウシタは冒頭の1文を指示し、一応肯定的に評価するが、その後それを批判する内容が続く。〔例11〕はコウシタの、〔例12〕はソウシタの例である。

〔例11〕 4月25日

- 9 ①いま、閲覧制度を最も利用しているのはダイレクトメール商法だ。②特定の年齢層や性別の人々を書き写し、商品や勧誘のチラシを郵送する。③全国で年間1300万件ある閲覧のうち、7～8割はこうした業者だ。④学習塾から勧誘のチラシが届き、「なぜ娘の年齢が分かったのか」といぶかる人も少なくない。

〔例12〕 5月10日

- 4 ①とりわけ、「安全を優先する企業風土」をつくる、と真っ先にいわざるをえなかったのは、JR西日本から見ても、安全に対する感覚がそれだけ鈍かったということだろう。
- 5 ①効率的な運営をして、収益をあげることは企業として当然のことだ。
②そうした意識が定着したのは、国鉄が民営化されたプラスの面だろう。
③しかし、収益を上げようとするあまり、安全を軽んじてしまったのでは元も子もない。

2.3 段落の結尾文 c に出現するコウシタ（14例）・ソウシタ（22例）

〔展開部〕で段落の結尾文 c のコウシタは、冒頭文に次いで数値の高い位置にあり、59例中14例（24%）を占める。ソウシタは、最も頻度が高く、50例中22例（44%）も占める。

コウシタ・ソウシタが段落内の先行文を指示し、それをとらえ直して文中に取り込む際、次のような言語形式が観察される。

- (1) [コ(ソ)ウシタ+語句ハ(ガ)] の形式をとる。(コ=8, ソ=9)
 (2) [コ(ソ)ウシタ+語句ヲ] の形式をとる。(コ=2, ソ=4)
 (3) [コ(ソ)ウシタ+語句ニ] の形式をとる。(コ=2, ソ=2)

- (4) [コウシタ + 語句カラ] の形式を取る (コ = 1)
 [ソウシタ + 語句デモ (デ)] の形式を取る (ソ = 2)
- (5) 叙述表現の成分になる (コ = 1, ソ = 5)

コウシタ・ソウシタとも全体的に出現するが、コウシタ・ソウシタとも(1)の頻度が高く、前者は14例中8例(57%)を占め、後者は22例中9例(40.9%)を占める。また「(5)叙述表現の成分になる」では、ソウシタが多く出現する。以下(1)(5)を取り上げ、検討する。

2.3.1 (1) [コ(ソ)ウシタ+語句ハ(ガ)] の形式をとる。(コ=8 ソ=9)

[例13] 4月15日(1)

- 10 ①1980年代後半に燃えさかった日米摩擦では、進出企業が現地の従業員も巻き込んで地元選出の議員に働きかけ、不買運動などに拡大するのを防いだ。②中国は政治システムが異なるとはいえ、こうした体験は大いに参考になる。

[例14] 5月2日

- 4 ①それから86年後のこの春、また若者たちが各地で反日運動を展開している。
- 5 ①中国の人々によれば、若者たちの心にあるのは日本の歴史認識の問題や国連安保理常任理事国入りへの反発ばかりではない。②拝金主義や腐敗がのさばり、経済的な格差が広がる一方の祖国への憂い。③政治への発言権の要求。④生活への不満。⑤こうした要素が複雑に入り交じっているのだという。

[例15] 4月27日

- 4 ①ウイルス対策ソフトはパソコンをウイルスから守るためのものだ。②こうした製品は安全と思いがちだが、安全対策の製品そのものにも欠陥がありうる、と専門家は言う。

[例13] の「こうした体験は」は先行の①文を指示し、[例14] の「こうした要素が」は先行の①文から④文までの内容を指示して、段落内の話題を括りまとめている。

それに対し〔例15〕は、先行の①文中の語句「ウイルス対策ソフト」を指示し、「こうした製品は」と、捉え直したものである。先行文の話題を受け継ぎ、コウシタの出現する文で、段落内の話題は終了している。

〔例16〕 6月5日

- 14 ①みんなで仕事を分かち合うワークシェアリングを進める。②正社員とパート労働者の賃金格差を縮める。③そうした工夫が、いまこそ社会に求められている。
- 15 ①日本の人口は06年にピークを迎え、その後は減っていく。②それはやむをえまいが、もう少し若い人たちが赤ちゃんを欲しいと思える社会をつくりたい。

〔例17〕 6月28日

- 14 ①個人として自由に考える。②史料を厳密に調べ、率直に批判し合う。③そうした学問のルールを共通の土俵にすることが大切ということなのだろう。
- 15 ①教科書を検証するという2期目の共同研究も平らな道ではあるまい。

〔例16〕〔例17〕も、段落内の先行文を指示し、段落の話題をまとめる働きをしている。ただ筆者の主張は、〔結尾部〕に当たる最後の段落に「社会をつくりたい」「平らな道ではあるまい」などと現れているため、ソウシタによって段落内の話題を取り纏めることで、後続の段落で、文章全体を締めくくる働きをもつ、筆者の見解を提示しやすくしているとも解せる。

2.3.2 (5) 叙述表現となる (コ=1 ソ=5)

〔例18〕 6月14日

- 8 ①監視役となる世銀やIMFにも注文がある。②途上国の資源開発や電力、通信、水道など、公共性の強い部門の民営化にこだわり、過大な利潤を追求する外資をのさばらせたり、国内の貧富の差を拡大したりすることがないように注意を払ってほしい。②南米ボリビアなどは、こうした失敗の典型例だろう。
- 9 ①さらに、債務削減による損失の分担では、対象国の歴史や貿易関係など経済実態も加味してはどうか。②多くは欧州の植民地だった。③植民

地政策の失敗やその後の貿易相手国の身勝手な振る舞いが、途上国の経済や社会に深い傷を残し、今なお苦しんでいる例は少なくない。

〔例19〕 4月18日

- 6 ①これまで、経済面でも存在感を高める中国について、世界貿易機関(WTO)などの国際的な枠組みに取り込む「関与政策」がとられてきた。
②G7がゲストとして中国を招いてきたのも、そうした路線に沿ったものだ。
- 7 ①だが、原油価格が高止まりし、世界的な景気拡大への楽観論は薄れてきた。

〔例18〕の「こうした失敗」は、②文の総てではなく、②文の「途上国の…国内の貧富の差を拡大したりする」までを指し、それを「失敗の典型例」と見なしているが、文章の展開から見ると、先行文に対する例示の意味を持つに過ぎない。つまり論の流れは、「①監視役となる世銀やIMFにも注文がある。」と述べ、第1の注文が②文であり、第2の注文が「9①さらに、債務削減による損失の分担では、対象国の歴史や貿易関係など経済実態も加味してはどうか。」である。筆者は、第1の注文に対し「南米ボリビア」の失敗例を上げ、第2の注文に対しては②文③文の例、すなわち植民地政策による失敗例を上げている。従ってコウシタの例は、先行文に対する例示の役割をしているにすぎない。

〔例19〕の「そうした路線」は、①文の総てを指しており、②文は6段落目の話題に区切りを付ける働きをもつ。それは7段落目の冒頭に逆接型の「だが」が置かれ、話題が切り替わっていることから見ても明らかである。

段落の結尾文にソウシタが多く現れるのは、段落内の話題に終止符を打つと同時に、その話題を過去の事実として処理することに関係すると見られる。

Ⅲ.3 結尾部

文章の〔結尾部〕に出現するコウシタ・ソウシタは、〔展開部〕がいずれも80%前後を占めていたのに対し、ともに15%前後と頻度は低くなっている。しかし〔展開部〕と同様、コウシタは冒頭文bに、ソウシタは結尾文cに集中する傾向があり、展開部と同様の機能が観察される。以下冒頭文bのコウシタと、結尾文cのソウシタを中心に検討する。

3.1段落の冒頭文bに出現するコウシタ

段落の冒頭文に位置するコウシタは、先行の叙述内容を括りまとめ、後続の文中に取り込む働きを持つが、同時に文章全体を括りまとめ、筆者の主張・意見・批評を述べる文に現れる傾向がある。

〔例20〕 4月19日(1)

- 12 ①フジにとっても、「勝ち戦」とはしゃいでいる時ではない。②買い戻し価格は、公開買い付け（TOB）の水準を大きく上回った。③会見でこの点を突かれたフジの日枝久会長は「内心忸怩（じくじ）たる思いはある」と語った。④安値でTOBに応じてしまった企業の中には、株主から経営責任を問われているところもある。
- 13 ①そもそも、この争奪戦を招いたのは、規模の小さいニッポン放送がフジの大株主だといういびつな資本構造があったからだ。②これでニッポン放送の株式を公開したら、グループをたやすく支配される危険は分かっていたはずだ。
- 14 ①こうした無理が多額の費用や株主間の不公平を招いたのなら、「忸怩たる思い」ではすまされまい。

〔例20〕は、ライブドアによるフジテレビ買収劇に一応の決着を見た事件を取り上げ、事件の概要を説明し、その問題点を指摘した後で、最後に筆者は「そもそも、この争奪戦を招いたのは…いびつな資本構造があったから」と見なしている。それを受けての14段落目である。そこにコウシタが現れ、「こうした無理が多額の費用や株主間の不公平を招いたのなら」と提題表現に組み込まれている。そしてその提題表現に対し筆者は、フジテレビ会長の言を取り上げ、「『忸怩たる思い』ではすまされまい」と、締めくくっている。従って〔結尾部〕の段落の冒頭文bに出現するコウシタは、筆者が一番主張したい重要な見解を表明する部分に出現し、文章全体を統括する文の要素として機能していると解することが出来る。

3.2文章の結尾文cに出現するソウシタ

〔例21〕 6月15日(2)

- 11 ①生活習慣病の予防に努める。②病院を機能ごとに分け、連携を進めることで、入院日数を短くする。③厚労省は新たな医療改革として、こう

した方策を掲げている。④目標を定めて取り組んでこそ実効も上がるし、その成果が確認できるというものだろう。

- 12 ①決め方次第では、必要な医療が打ち切られるような副作用も出かねない。②経済の伸びだけでなく高齢者の増加なども加味することで、国民が納得できるものにするのが不可欠だと思う。
- 13 ①医療制度の改革はこれからが本番だ。②抑制目標を超えたときはどうするのか。③目標を置くことで医療はどう変わるのか。④そうした点も考えあわせながら新しい物差しをつくってもらいたい。

〔例21〕の「④そうした点も」は、13段落内の②文の内容を受けているが、筆者の主張は「新しい物差しをつくってもらいたい」方にあるため、「そうした点も考えあわせながら」は、加味してほしい情報として提示されたものでしかない。

結尾文に出現するソウシタには、段落の話題を括りまとめる機能はあるが、文章全体を統括する機能は認められないようである。

IV まとめと今後の課題

本稿では、統括機能について永野賢が「連続する文の相互関係の中に見いだされるはずである。(略) 実際上は、文中の一つの語句がその機能を果たしていると認められることもあり、また、文の集合としての段落がその役割を果たすと考えられることもある。」と述べ、文のレベルだけではなく「文中の一つの語句」も想定している点を踏まえ、指示表現コウシタ・ソウシタを取り上げ、考察してきた。

考察の結果、コウシタ・ソウシタいずれも、後接する語句と一体化して先行叙述内容を取り纏め、捉え直すことで「分裂展開する思想を集約して、これを統合する任務」を果たしていることが確認できたかと考える。統合の仕方は、コウシタ・ソウシタの出現位置と関係し、段落の冒頭文に出現する場合は、両者とも先行段落を取り纏める働きをなし、段落の結尾文に出現する場合は段落内の先行文(文脈)を指示し、それを取り纏める働きをなす、ということが判明した。また段落の冒頭文に出現する場合、コウシタとソウシタの取り込み範囲に差があり、ソウシタは先行段落を指示しその内容を取り込む働きが一般的であったが、コウシタは先行段落を指示するだけでなく、先行する複数の段落

を指示し、それらの内容を大きく捉え直す働きがあり、また先行段落を飛び越えてさらに前の段落の内容、段落中の語句を指示することで、それまでの叙述の展開を基に引き戻して叙述をさらに展開させるような働きも確認出来たかと思う。

なお本稿で考察中気づいたのは、コウシタ・ソウシタに後接する語句が様々な形式で出現する点である。本稿ではすべて要約語句と見なし、一括して扱ったが、今後この語句について分析する必要性を痛感する。この後接の語句に関しては既に林四郎（1983）も多少触れているので、それを紹介しながら本稿のまとめとしたい。

林四郎（1983）は、「1.4 指示に伴う表現のとらえ直しの現象」で、「表現のとらえ直し」が「どうやら、文章論的見地から見て、相当大きな問題をはらんでいるように思われる。」と述べ、「とらえ直し」を「文法上のとらえ直し」と「意味上のとらえ直し」の2つに分類する。「文法上のとらえ直し」は、「一度、表現の場に提出したものを、指示語の援けを借りてある形にまとめたら、それを、次の文表現の中で、主語とか述語とか、何かの格に収めて、新しい文要素に再生産することをいう。」と述べる。

また「意味上のとらえ直し」については、「一層大事な問題であるが、これには、とりあえず次のような名称を与えて、以後の研究のための覚え書きとしておきたい。」とし、8分類を提示する。

- 〈コト化〉先行叙述を一つの「こと」にまとめる。
 - 〈トキ化〉先行の叙事的叙述の中に「時」を見出す。
 - 〈トコロ化〉先行の叙事的叙述を、ある「場所」の中に見出す。
 - 〈サマ化〉先行の叙事的叙述を、何ものかの「風体」として見る。
 - 〈ホド化〉先行叙述の中に、ある見地からの「程度」を見出す。
 - 〈ココロ化〉先行の叙事内容に、ある心情をそえてとらえ直す。
 - 〈類化〉先行叙事内容を、範囲をひろげて、一つの類としてとらえる。
 - 〈レベル変換〉抽象レベルを変えたり、メタレベルで見たりして、とらえ直す。
- （以上、37頁）

林四郎が分析対象とした夏目漱石『夢十夜』には、コウシタ・ソウシタの例は挙がっていないが、「意味上のとらえ直し」の分類は、社説における論述の展開、統括機能の仕組みを観察する上で参考になる。社説の場合は、林四郎の

分類のうち〈レベル変換〉が最も多く採用されているようだが、このことは論述の展開にあたり、読者に明確に論旨を把握させ、主張の妥当性を理解してもらうために、適宜、先行叙述内容をとらえ直し、要約という作業によって先行叙述内容を取り纏め、それを後続文の成分に組み込みながら叙述を展開するという、社説が採用する展開方式と関係があるように思われる。

今後、社説における「意味上のとらえ直し」を詳細に検討し、また社説ばかりでなく、文芸的文章をデータとしてコウシタ・ソウシタの機能を観察することを通して、文段成立に重要な役割を担う統括機能について、研究を進めていきたいと考える。

注1 森田良行 (1993) 『言語活動と文章論』 106・107頁

注2 金水敏・田窪行則編 (1992), 倉持保男 (1987), 堀口和吉 (1977) など

注3 正保勇 (1981), 高崎みどり (1988), 林四郎 (1983), 馬場俊臣 (1992) など

〔参考文献〕

市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版

木村英樹 (1983) 『『こんな』と『この』の文脈照応について』 『日本語学』 11-2
明治書院

金水敏・田窪行則編 (1992) 『日本語研究資料集 指示詞』 ひつじ書房

倉持保男 (1987) 「文章中の指示語の機能」 『国文法講座 6 時代と文法 —— 現代語』
明治書院

佐久間まゆみ (2003) 「第5章 文章・談話における『段』の統括機能」 北原保雄監
修・佐久間まゆみ編 『朝倉日本語講座 7 文章・談話』 朝倉書店

正保 勇 (1981) 『『コソア』の体系』 『日本語の指示詞』 (日本語教育指導参考書 8)
国立国語研究所

高崎みどり (1988) 「文章展開における“指示語句”の機能」 『国文学 言語と文芸』
103 大塚国語国文学会

寺津典子 (1983) 「談話における照応表現」 『月刊言語』 12-12 大修館書店

時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』 山田書院

時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』 岩波全書

永野 賢 (1986) 『文章論総説』 朝倉書店

林 四郎 (1983) 「代名詞が指すもの、その指し方」 『朝倉日本語新講座 5 運用 I』
朝倉書店

馬場俊臣 (1992) 「指示語の文脈展開機能」 『日本語学』 11-4 明治書院

堀口和吉 (1977) 「指示語『コ・ソ・ア』考」 『論集日本文学・日本語 5 現代』 角
川書店

森田良行 (1993) 『言語活動と文章論』 明治書院